

〈訳注〉

ザイン・アッディーン・マアバリー・マリバーリー著
『ポルトガル人の状況に関するジハード
戦士の贈り物』 訳注（7）

谷 口 淳 一

第4章 フランクのマラバルへの到来と彼らの醜悪な行為の一部（承前）

[65 (143)]

第11節 ザモリンとフランクの5度目の和平

フランクの問題が以上のような形で続き、ムスリムたちはますます勢いを失い貧窮してしまったので、ザモリンはフランクと和平を結び、彼の臣民たちは、他の者たちと同様に、フランクの許可証を携えて航海に出ることとなった。この和平成立は、〔9〕63年1月1日¹⁾のことであった。

それから2年以上経ったときに、フランクとカナノール²⁾、ダルマファッタン³⁾およびそれらの周辺のムスリムたちとの間で対立が生じた。彼らは、2年足らずのあいだ対立していたが、そののち和解した。そして、ムスリムたちは、従来の慣習どおり、フランクの許可証を携えて航海に出るようになった。両者が対立していた時期には、有力な指導者ア

*本稿は『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』第4章第11節～第12節〔*Tuhfa/L*: 65–74〕の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ジハード戦士の贈り物（1）」および「谷口2012」を参照されたい。本稿が扱う時期のマラバルおよびその周辺の諸事件については、Logan 1887 [pp. 331–334] に概要が記されている。

- 1) ユリウス暦1555年11月16日。なお、*Tuhfa/L*ではMuharram（1月）の語が欠けているが、A・B・C各写本より補った〔A: f. 26b; B: f. 142b; C: p. 65〕。
- 2) Kannanūr (Kannur/Cannanore). Kannur県の中心都市。カリカットの北西60kmに位置する。
- 3) Darmafattan. カナノールの約20km南に位置する河口の島にあった港市。現在のDharmadamに比定される〔Nainar 1942: 32; 大旅行記：6巻174頁注127〕。

リー・アーズィラージャー⁴⁾——神が彼に善行を成就させんことを⁵⁾——がジハードに尽力していたのであった。彼はジハードに大きな努力を傾け、財貨を費やした。しかし、その地の支配者コーラッティリ⁶⁾と民は、そのジハードについて彼に同意しなかったのである。

同じ時期に、呪われしフランク——神が彼らを見捨てんことを——は、アーズィラージャーを圧迫すべく、彼と関係の深いマラバルの島々ヘグラープ船⁷⁾で向かい、アミーニー島⁸⁾に上陸し、島民の多数を殺害し、400名以上の男女を捕らえ、島にあった財貨の大部分を略奪し、その家屋とマスジドの大半を焼き払った。[66 (142)] アミーニーへ入るよりも前に、彼らはシータラーカム⁹⁾に到来し、そこにいる者の一部を殺害し、別の一部を捕虜にした。これらの島々の民は、自分たちには武器もなければ、戦闘員 (man yuqātilu) もいないということを気に掛けなかった。このような状態にもかかわらず、彼らのうちの一群の人々が〔戦って〕殉教した。そのなかには、当地のカーディーで徳のある善良で高齢の男性——神が彼に慈悲をかけんことを——や、善良な女性もいた。武器がないにもかかわらず、彼らは殉教を覚悟して〔戦った〕。島の住民たちは、フランクに土や石を投げつけ、木材片で打って〔戦ったが、ついにはフランクが〕彼らを殺害したのである。神が彼らに広大な慈悲をかけんことを。

その島々が多いが、都市に相当する大きな島は、アミーニー、カワラ

4) アリー・アーズィラージャー (‘Alī Ādirāgā): カナノールの有力なムスリム一族であるアラッカル (Arakkal) 家の当主が帯びた称号。アリー・ラージャー (‘Alī Rāgā) ともいう。同家はマラバルの海上交易を基盤とし、16世紀から18世紀にかけて、経済のみならず政治的にも大きな力を有した [Mailaparambil 2012: 1-3, 45-47; ジハード戦士の贈り物 (6): 34頁]。

5) 神が彼に善行を成就させんことを (waffaqa-hu Allāhu li-l-ḥayrāti): *Tuḥfa/L* では前置詞 li が欠けているが、各写本より補った [A: f. 27a; B: f. 143a; C: p. 65; D: f. 21b]。

6) Kūlattirī (Kōlattiri). カナノール周辺を領有していた支配者の称号。

7) グラープ船 (aḡriba): sg. ḡurāb. 軍用船の一種。櫂と帆の両方を用いる [Agius 2008: 348-351]。

8) Ġazīrat Amīnī (Amīndīvi). マラバル沖のラッカディブ諸島に属する島。なお、ラッカディブ諸島の各島名のアラビア文字表記と現代のローマ字表記については、Tibbetts 1971 [p. 460] を参考にした。

9) Šītalākam (Chetlat). ラッカディブ諸島に属す島。

ディーブ¹⁰⁾、アンドルー¹¹⁾、カルフィーニー¹²⁾、ミリカイ¹³⁾の5島である。小さいが人口の多い島は、アカティー¹⁴⁾、カンジャマンジャラー¹⁵⁾、キルタン¹⁶⁾、シータラーカムである。

誉れ高き至高なる神は、その僕たちに対する試練を欲すると、フランクに猶予を与え、たとえばマラバルやグジャラート (Ġuzarāt)、コンカン¹⁷⁾ などにある港市の多くにおいて彼らに力を与えた。彼らは、知恵を傾け意見を集めて、多くの国々を支配した。そして、ホルムズ (Hurmūz.)、マスカット¹⁸⁾、モルディブ (Dīw Maḥal)、スマトラ (Šamṭara)、マラッカ (Malāqa)、マルク¹⁹⁾、マイラープール²⁰⁾、ナークファタン²¹⁾——最後の2港は、コロマンデル (Šūlamandal) の港市である——、[67 (141)] セイロン (Sīlān) の多数の港市に城塞を建設した。彼らは中国 (al-Šīn) にまで至り、上記やその他の港市における商売は彼らのものとなった。それらの場所では、ムスリム商人たちは彼らに対して奉仕するがごとくへりくだり従順であり、フランクの欲求が少ないものしか商えない。フランクが欲し利益が大きい品物は、彼らの独占となり、彼ら以外の者が商うことはできないのである。

彼らは当初、ムスリムに胡椒と生姜の商売を禁じたのであるが、その後、シナモン (qirfa)、クローブ (qaranful)、ナツメグ (basbās) など、利益の大きいものの商売を禁じ、アラブの地 (barr al-'Arab)、マラッカ、

10) Kawaradīb (Kavaratti). ラッカディブ諸島に属す島。

11) Andrū (Androth). ラッカディブ諸島に属す島。

12) Kalfinī (Kalpeni). ラッカディブ諸島に属す島。

13) Milikai (Minicoy). ラッカディブ諸島の南端に位置する島。

14) Akatī (Agatti). ラッカディブ諸島に属す島。

15) Kaṅḡamaṅḡalā (Kadmat). ラッカディブ諸島に属す島。

16) Kiltan. ラッカディブ諸島に属す島。

17) Kunkan (Konkan). マラバルの北に連なる海岸地帯の名称。現在のマハーラーシュトラ州の海岸部にほぼ相当する。

18) Maskat (Muscat). アラビア半島東部オマーン湾に臨む港市。アラビア文字ではMasqaṭとも表記される。

19) Malūkū (Moluccas). インドネシア東部に分布するマルク諸島 (モルッカ諸島) [Tibbetts 1971: 500]。

20) Maylāpūr (Mylapore). チェンナイ (マドラス) 南部の港市。聖トマス殉教の地とされる。

21) Nāk-fatan. タミルナドゥ州コロマンデル海岸南部の港市 Nagapattinam であろう [Tibbetts 1971: 467]。

アチェ（Aṣī）、テナッセリム²²⁾ などへの航海を禁じた。したがって、マラバルのムスリムには、ビンロウ（fawfal）、ココヤシ（nāraḡīl）、衣類などの商売と、グジャラート、コンカン、コロマンデル、カヤルパティナム地方（atrāf Qā'il）への航海しか残らなかった。

彼らはまた、マラバルの民から米を断つために、ホンナバル²³⁾、バーサルール²⁴⁾、マンガロール（Maṅgalūr）に城塞を築いた。というのも、米はそれらの港市からマラバルやゴア（Kūwah）へ、またアラブの地へと運ばれるからである。フランク——神が彼らを見捨てんことを——は最果ての地からさまざまな物品を運ぶようになり、各地に満ちて増加した。諸港市の支配者たちは彼らに屈服し、ついには、それらにおける支配はフランクによる支配へとかわっていったのである。[68 (140)] 彼らの安全保証と許可証を伴う場合を除き、航海は途絶えた。彼らの商売と船舶は増加し、彼らの船舶による場合を除き、ムスリムの商売は減少した。

フランクが建築した城塞を奪ったのは、以下の者たちだけであった。まず、スルターンにしてジハード戦士であるスルターン・アリー・アシー²⁵⁾——神が彼の寝所を照らさんことを——は、スマトラを征服し²⁶⁾そこをイスラームの家とした。ムスリムを代表して、彼に神が最良の報いを与えんことを。さらに、カリカット港市（bandar Kālīkūt）の支配

22) Ḍanāṣarī (Tenasserim). マレー半島北部西岸の地域名。現在はミャンマー領の最南端に位置する。語頭の文字は、アラビア文字 dāl の下に ˙ が付されたもの。アラビア文字では Tanāṣarī という表記もみられるようである [Tibbetts 1971: 477, 481]。なお、*Tuḥfa trans/N2* [p. 131, n. 4] は、フィリピンの Danao（セブ島）と推測している。

23) Hannūr (Honnavar). ゴアの南南東約 110km に位置する港市。イブン・バットゥータが同地を訪れている [大旅行記 6 巻 106–112 頁、157–158 頁注 54; *Ibn Baṭṭūṭa/DS*, v. 4: 65–71; *Ibn Baṭṭūṭa trans/Gibb*, v. 4: 802–805]。なお、上記の各翻訳ではこの地名を Hinawr または Hinaour と記しているが、アブー・アルフィダーは、最初の h には a の母音を付け、n は二重子音にして読むと説明している [Taqwīm: 354]。

24) Bāsalūr. ホンナバルとマンガロールの中間にあった港市 Bāsarūr であろう [Taqwīm: 354; Nainar 1942: 28; Tibbetts 1971: 456]。同地を訪れたイブン・バットゥータは Abū Sarūr と記している [大旅行記: 6 巻 118 頁、167 頁注 98; *Ibn Baṭṭūṭa/DS*, v. 4: 77; *Ibn Baṭṭūṭa trans/Gibb*, v. 4: 807–808]。

25) al-Sulṭān 'Alī al-Aṣī. アチェ王国の王 'Alī Muḡāyat Šāh (1530 年頃没) のことか。彼は、1520 年頃にポルトガル人からスマトラ北部を奪ったことで知られる [“Aceh,” EI 3; NID: 346–347]。

者ザモリンは、カリカットとチャリヤム²⁷⁾の城塞を征服した。また、セイロンの支配者は、フランクがそこに建てた城塞をすべて征服した。ただし、それらの城塞は他のものと異なり堅固ではない。

当初、フランクは、自分たちの安全保証と許可証を尊重していた。したがって、何らかの理由がない限り、彼らの許可証を持っている船主に危害を加えることはなかった。ところが、〔9〕60年²⁸⁾頃より、彼らは船主に航海の許可証を与えておきながら、洋上で (fi al-bāḥa) 船主を捕らえると、その船と積荷を奪い、船内のムスリムやその他の人々を虐殺し水中に沈めるという最悪の方法で殺害するようになった。フランクはこれらの人々を縄で縛り、そのうちの多くの者は網のようなものに入れたうえで、海中に沈めたのであった。

〔9〕70年²⁹⁾ またはそれ以前のことであるが、〔69 (139)〕フランクがゴアでアビシニア人ムスリム商人たちの大人数の集団を捕らえ、彼らにキリスト教へ戻ることを強制し痛めつけた。その結果、ほとんどの者が表向きはキリスト教徒となり、所持している財産を持ってゴアから出て行った。その後、称えるべき神のおかげで、彼らはイスラームに戻ったのである。しかし、改宗を強制されたあるアビシニア人女性は、それを拒否して審問を受け、それゆえについに殺害されてしまった。神が彼女に慈悲をかけんことを。

第12節 ザモリンとフランクとの対立の原因、後者との戦いへのグラブ船の出撃

フランクによる上述の行為やそれに類することが度重なり、ムスリム

26) *Tuhfa*/Lでは、「スマトラを征服し」の後に wa ḡala'a と読める語句が見えるが、これは直後の ḡa'ala-hā (そこを〜とした) の一部が綴りの順を違えたうえで重複して写されたと考え、省いて解釈した。写本のうちこの語句が記されているのはD写本のみで、他の3写本にはこの語句は見えない [A: f. 28b; B: f. 144a; C: p. 68; D: f. 22b]。なお、Nainarはこれを地名と考えたようで、Jala'a と訳出しているが、何も注記していない [*Tuhfa_trans*/N I: 81]。

27) Šāliyāt (Chaliyam). カリカットの南10kmに位置するチャリヤム川河口の港市 [Nainar 1942: 73; 大旅行記: 6巻193頁注216]。

28) ユリウス暦1552年または1553年。

29) ユリウス暦1562年または1563年。

の航海が禁じられて彼らの打つ手が限られてくると、プドパッタナム³⁰⁾、スィッコディ³¹⁾、ファンダライナ³²⁾などの民からなる一団が小型グラープ船と兵器を準備するよう求められた³³⁾。そして、フランクの許可証を持たずに海に出て、フランクに対してジハードを仕掛け、彼らのグラープ船とマルカブ船³⁴⁾を手当たり次第に拿捕した。ザモリンの臣民であるカッパト³⁵⁾、バンドル・ジャディード³⁶⁾、カリカット、ポンナニ³⁷⁾の民が彼らに続いた。彼らはフランクのマルカブ船とグラープ船の多くを奪い、[70 (138)] 大勢を捕らえ、多くの財貨がムスリムのものとなった。かつて一連の戦いの最初期にムスリムが目の当たりにしたフランクの勝利とは逆に、神は、勝利と征服の印をムスリムに見せたのである。さらに彼らは、グジャラートやコンカンなどの不信仰者たちの船も多数拿捕した。フランクは、完璧な防備を備えるか多数のグラープ船とマルカブ船を伴わない限り、ほとんど航海しなくなった。

ところが、不信仰者たちの財貨が少なくなると、非道かつ敵対的なことに、グラープ船の民はムスリムの財貨を強奪し始めた。その主な理由は以下の通りである。グラープ船の民のほとんどは、多くの財貨を持っていない細民であり、それゆえ、大部分のグラープ船は集団内で共有されている。彼らは出撃時に、ムスリムの財貨には手を出さないと約束していたのであるが、不信仰者の財貨から彼らの支出に見合うだけのもの

30) Pudfattan (Pudupattanam/Putupattanam). マヘの南東にあった港市 [Nainar 1942: 29; 大旅行記: 6 巻174–175頁注128]。

31) Tirkūd. (Trikkodi/Thikkodi). カリカットの北西30kmに位置する港市。語末の文字は、アラビア文字dālの下に:が付されたもの。Cf. Logan 1887: 72.

32) Fandarayna/Fandarīna. マラバル海岸北部、カナノールとカリカットの間に存在した港市 [Nainar 1942: 34–35; Tibbetts 1971: 457; 大旅行記: 6 巻176–177頁注138]。

33) 「求められた」と訳出した箇所は、*Tuhfa/L* では intadā (集まった) となっているが、B [f. 144b]、C [p. 69]、D [f. 23a] の各写本に従い、untudiba (委託された) と読んだ。

34) マルカブ船 (marākib): markab (pl. marākib) は船舶一般を意味する語であり、本訳では原則として「船」と訳している。ただし、この箇所のように、グラープ船など他の種類の船と併記されている場合は、区別するために「マルカブ船」と訳している。

35) Kāpkāt (Kappatt). カリカットの10km余り北西に位置する港市。

36) al-Bandar al-Ġadīd. 「新しい港」という意味の名称から、比較的近い時代にザモリン領内に新設された港と推測されるが、その位置などは不明である。

37) Fannān (Ponnani). カリカットの東南6kmに位置する港市。

が得られなかった場合は、支出分と同程度のものを得るために、たとえムスリムの財貨であったとしても、見つけたものは奪った。そして、ムスリムの財貨を奪った場合〔でも〕、彼らはそれを持ち主に返さないのである。というのも、彼らの間には、実力を伴って彼らを支配する者がいないからである。国の支配者は彼らが奪ったものから分け前を得ており、〔上記の行為を〕禁止するだけでは、彼らに対してほとんど効き目がない。敬虔さを堅持する者であれば話は別だが、そのような人物はめったにいないのである。

〔9〕74年9月中旬³⁸⁾、ポンナニとファンダライナなどの民がポンナニから〔71 (137)〕およそ12隻のグラブ船で出航し、ポンナニ沖でフランクのバルシャ船³⁹⁾を拿捕した。それは、ベンガル (Bangāla) から到来した船で、米と砂糖を積んでいた。

〔9〕76年6月8日⁴⁰⁾土曜、ポンナニとファンダライナなどの民から成るグラブ船の民が、ポンナニから17隻のグラブ船で出航した。その中にはクッティ・ブーカル⁴¹⁾がいた。彼らはコーチン (Kaṣī) から出航した大きなバルシャ船をチャリヤム沖で拿捕した。その船は完全に装備され、フランクの^{つわもの}勇者とキリスト教への改宗者 (mutanaṣṣir) および彼らの奴隷あわせて約1000人が乗船し、また、素晴らしい財貨が積まれていた。戦闘時にバルシャ船で火の手が上がり、船は燃えてしまった。ムスリムは大きな大砲をいくつか手に入れた。使用人と奴隷以外に、フランクの勇者と有力者100人以上がムスリムに捕らえられた。残りの者は、ある者は溺れ、別の者は焼かれて死亡した。以上のことについて、神に称えあれ。

それから数日が過ぎた⁴²⁾後、グラブ船の民はカヤルパティナム方面へと出航し、フランクの船22隻を拿捕した。そこには、キリスト教への

38) ユリウス暦1567年3月下旬。

39) バルシャ船 (barša) : 帆権両用の船。ガリオット船 (galliot) [Agius 2008: 330]。

40) ユリウス暦1568年11月27日。

41) Kutti Būkar (Pūkar). Kuṅḡ 'Alī (Kunjali/Kunhali) 2世。クンジュ・アリーは、マラッカール家の当主が帯びた称号。同家は16世紀にザモリンの下で船団を率いて軍事活動に従事したことで知られる [Tuḥfa_trans/N2: 132; Narayana 2001: 1300–1303; ジハード戦士の贈り物 (5) : 23頁注39]。

42) 「過ぎた」と訳した語は、Tuḥfa/Lではmāḍī (過ぎ去った [形容詞]) となっているが、各写本 [A: f. 30b; B: f. 145b; C: p. 71; D: f. 24a] に従いmuḍīy (過ぎること [動名詞]) と読んだ。

改宗者も乗っていた。これらの船は、米を満載し、カヤルパティナムとその地方〔72（136）〕、コロマンデルなどから到来した船で、そこには3頭の小さなゾウが載っていた。彼らは拿捕した船を伴ってポンナニへ向かい、それらをその川に入船させた。

〔9〕78年6月下旬⁴³⁾、前述のクッティ・ブーカルは、夜にマンガロール川へ6隻のグラープ船で入り込み、その地のフランクの城塞の大部分を焼き払い、1隻の小さなグラープ船を奪ったうえで、同行していたグラープ船団とともに無事にそこから退去した。カナノールの近くに至った時、フランクのグラープ船およそ15隻と遭遇した。クッティ・ブーカルはフランクと戦って殉教し、彼——神が彼に広大な慈悲をかけんことを——の遺体は失われてしまった。同行していたグラープ船のうち2隻だけが無事であった。彼——神が彼に慈悲をかけんことを——は、フランク——神が彼らを見捨てんことを——に対するジハードに一途な意図を抱いていたのである。

さて、有力な指導者であるカナノールの指導者アリー・アーズィラージャー——神が彼に善行を成就させんことを——は、呪われしフランクが原因でムスリムに生じた疲弊、甚だしい貧窮、商売の停止が長引いているのを見て、もっとも偉大なスルターンにしてもっとも気高きシャーたるアリー・アーディル・シャー——神が彼を支援し、神を満足させることを彼に成就させんことを——に、贈り物を添えて手紙を送った。その手紙には、マラバルのムスリムに降りかかったフランクの圧政と危害に関する苦情、これら虐げられた者たちを神の道のためのジハードによってフランクの害悪から救い出して欲しいという救援要請が記されていた。

そこで、誉れ高き神は、彼の心にゴア港市に対する戦争の準備をする気持ちを起こさせた。というのも、そこはインドにおけるフランクたちの首府（dār al-mamlaka）であるが、かつては彼の最も高き祖先⁴⁴⁾——神が彼に慈悲をかけんことを——の港市の一つであったのである。また、かつて〔73（135）〕ヴィジャヤナガル⁴⁵⁾を滅ぼし、その支配者を殺害し

43) ユリウス暦1570年11月下旬。

44) 彼の最も高き祖先（ḡaddi-hi al-a'lā）: 'Alī 'Ādil Šāhの曾祖父Yūsuf 'Ādil Šāhを指す。アーディル・シャーヒー朝とポルトガルによるゴアをめぐる抗争については「ジハード戦士の贈り物（4）」〔41-42頁〕にも記述がある。

た直後に、アーディル・シャーとニザーム・シャー⁴⁶⁾——神がみずからを満足させることを両者に成就せんことを——の間に、両者がゴアとチャウルを征服するという合意が成っていたのであった。

アーズィラージャーの手紙がアーディル・シャーに届くや、彼と大臣たちは直ちに陣を出陣し、ゴアに対して陣を構え、フランクに対する戦いと糧食〔供給〕の遮断を開始した。また、アーディル・シャーはザモリンに書状 (marsūm) を送り、その中でゴアとの戦いを開始したことを述べ、自分への支援とフランクに対する糧食〔供給〕の遮断を求めた。もっとも、ザモリンと彼の臣民たちは、以前より多年にわたってフランクと対立し戦っていたのであるが。そして、ザモリンがチャリヤムでフランクとの戦いに忙殺されているところに、アーディル・シャーの使節が到着したのであった。

ニザーム・シャーと大臣たちは、チャウルに対して陣を構えて戦い始め、巨大な大砲で城郭 (hiṣār) を破壊した。征服することは可能であったが、ニザーム・シャーは、アーディル・シャーに対して悪意を抱いており、他方フランクの権勢を過大視していたため、〔攻撃の手を〕弛め、戦いを止めて、フランクと和平を結んだ。

アーディル・シャーについては、〔フランクと和平を結んだことは〕やむを得ない。というのも、ゴアは彼の軍団から遠く、川が両者の間を妨げており、そのうえ堅固で近寄り難く、そこには多くの馬⁴⁷⁾ がいて、比類なき強者である神⁴⁸⁾ が成就させてくれなければ、それを支配するこ

45) Biḡānagar. 14–17世紀にインド南部を支配したヒンドゥー王国 (1336–1649年)。なお、注頭に示した *Tuḥfa/L* の綴りはA写本 [f. 31a] とD写本 [f. 24b] に見られる。B写本 [f. 146b] は Biḡyānagar、C写本 [p. 73] は Biḡānagar と読める。

46) Nizām Ṣāh. 前後の記述の年代を考えると、972–997 [1565–1588/89] 年に在位したニザーム・シャーヒー朝 (アフマドナガル王国) の君主ムルタダー 1 世 (Murtaḍā b. Ḥusayn) [NID: 326] と考えられる。

47) 多くの馬 (ḥuṣun kaḡira): ḥuṣun は ḥiṣān (馬) の複数形。軍馬の多さを表現していると考えられるが、文脈からするとやや不自然にも思える。Nainar は “extensive fortifications” と訳している [*Tuḥfa trans/N I*: 86]。彼はこの語を ḥiṣn (防御施設) と読んだと思われるが、これは単数形であり、後続の形容詞 kaḡira (多くの) が女性形 (複数形に対応) であることと整合しない。また ḥiṣn の複数形は ḥuṣūn であり、テキスト中の語とは綴りが異なる。つまり Nainar の解釈の方が文脈には合うが、文法的にはうまく説明できない。なお、4 写本とも当該箇所は本注冒頭に掲げた綴りとなっている [A: f. 31b; B: f. 146b; C: p. 73; D: f. 24b]。

48) 比類なき強者である神 (Allāh al-ʿAzīz): *Tuḥfa/L* では ʿAzīz に冠詞が付いていないが、C写本 [p. 73] に従って補った。

とはできないのである。さらに、一部の大臣たちが、アーディル・シャーを捕らえてゴアのフランクの許にいる別の王族を即位させることでフランクと合意したのであった。アーディル・シャーは、このことに気づき恐れて、軍営から密かに脱出した。足場を固めると、[74 (134)] アーディル・シャーはその大臣たちを呼び出して投獄し、懲らしめたうえで彼らに対する恩遇を取り消した。

その後、アーディル・シャーは、必要に迫られてフランクと和平を結んだ。しかし、フランクは、この期間にゴアの防備を強化し非常に近寄り難くしたため、外部から侵入することは不可能になった。以上のことは、比類なき強者にして叡智者による定めなのである⁴⁹⁾。また、実はニザーム・シャーと彼の大臣たちおよびアーディル・シャーの大臣たちは、アーディル・シャーを欺いていたのであった⁵⁰⁾。彼らは、宗教の敵であるフランクから賄賂を受け取り、彼らに食糧を届けて支援したのである。神が彼らに然るべき報いを与えんことを。

49) 『クルアーン』 6 章96節に類似の一節がある。

50) この文の冒頭は、*Tuhfa/L* と *Tuhfa/Q* [p. 47 (50)] および 4 写本すべて [A: f. 32a; B: f. 147a; C: p. 74; D: f. 25a] で *wa-ayḍan qad ḥada'a-hu wa-Nizām Ṣāhu...*（また、実は彼およびニザーム・シャーと…が彼を欺いていたのであった）となっており、動詞 *ḥada'a*（欺く）の活用のみで示される 3 人称単数男性の主語が「ニザーム・シャー」に先立って存在する形になっている。このままで読むと、動詞の最初の主語の解釈が難しい。そこで、*Tuhfa/T* [p. 293] に従って、下線を引いた接続詞 *wa*（および）を除いて読んだ。Nainar も同様の読み方をしている [*Tuhfa_trans/N1*: 86]。

文献および略称

『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 テキスト・翻訳
〈写本〉

Ms. 2799. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 714) [A (A写本)]

Ms. 2807. British Library. (India Office旧蔵 Loth 1877: no. 1044-V) [B (B写本)]

Ms. Arabic 28. Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. (Morley 1854: no. IV) [C (C写本)]

Ms. Add. 22375. British Library (British Museum旧蔵 Cureton 1846-71: no. 945) [D (D写本)]

〈刊本〉

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuḥfa/L*]

Tuḥfat al-muḡāhidīn fī ba'ḍ aḥbār al-Purtukāliyyīn. Ed. al-Ḥakīm al-Sayyid Šams Allāh al-Qādirī. Ḥaydarābād: Maṭba' al-Tārīḥ, [1931]. [*Tuḥfa/Q*]

Tuḥfat al-muḡāhidīn fī aḥwāl al-Burtuḡāliyyīn. Ed. Muḥammad al-Sa'īd al-Ṭarīḥī. Bayrūt: Mu'assasat al-Wafā', 1985. [*Tuḥfa/T*]

〈翻訳〉

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（１）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』15号、2016年：87-97頁。〔ジハード戦士の贈り物（１）〕

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（２）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』16号、2017年：33-54頁。〔ジハード戦士の贈り物（２）〕

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（３）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』17号、2018年：33-42頁。〔ジハード戦士の贈り物（３）〕

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリー・マリーバーリー著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（４）」『京都女子大

学大学院文学研究科研究紀要史学編』18号、2019年：27-46頁．[ジハード戦士の贈り物（4）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリ－・マリ－バーリ－著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（5）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』19号、2020年：17-29頁．[ジハード戦士の贈り物（5）]

谷口淳一「ザイン・アッディーン・マアバリ－・マリ－バーリ－著『ポルトガル人の状況に関するジハード戦士の贈り物』 訳注（6）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』20号、2021年：27-40頁．[ジハード戦士の贈り物（6）]

Historia dos Portugueses no Malabar por Zinadim. Ed. and trans. David Lopes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1898. [*Tuhfa_trans/L*]

Tuhfat-al-mujāhidīn: An Historical Work in the Arabic Language. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. Madras: University of Madras, 1942. [*Tuhfa_trans/N1*]

Tuhfat al-mujāhidīn: A Historical Epic of the Sixteenth Century. Trans. S. Muhammad Husayn Nainar. [Eds. P. K. Koya Kutty and A. I. Vilayathullah] Kuala Lumpur: Islamic Book Trust, 2006. [*Tuhfa_trans/N2*]

Tohfut-ul-Mujahideen: An Historical Work in the Arabic Language. Trans. M. J. Rowlandson. London: Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1833. [*Tuhfa_trans/R*]

辞典・目録類

Bosworth, Clifford Edmund. *The New Islamic Dynasties*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 1996. Paper back ed., 2004. [NID]

Cureton, William, and Charles Rieu. *Catalogus codicum manuscriptorum orientalium qui in Museo Britannico asservantur*. Pars 2. Londini: Impensis Curatorum Musei Britannici, 1846-71. 3 vols in 1 vol. Hildesheim: Georg Olms, 1998. [Cureton 1846-71]

Gaborieau, Marc, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam, Three*. Leiden: Brill, 2007-. [EI 3]

Loth, Otto. *A Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Library of the India*

Office. London, 1877. [Loth 1877]

Morley, William Hook. *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. London, 1854. [Morley 1854]

史料・史料訳注

『コーラン』 藤本勝次ほか訳. 全 2 冊、中央公論新社〈中公クラシックス〉、2002年.

『日垂対訳・注解 聖クルアーン』 [三田了一訳]、改訂版、日本ムスリム協会、1982年.

イブン・バットウータ『大旅行記』 イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注、全 8 巻、平凡社〈東洋文庫〉、1996-2002年. [大旅行記]

Abū al-Fidā', 'Imād al-Dīn Ismā'īl b. 'Alī al-Ayyūbī. *Taqwīm al-buldān*. Ed. J. T. Reinaud and W. M. Slane. *Géographe d'Aboulféda*. Paris: L'Imprimerie royale, 1840. [Taqwīm]

Ibn Baṭṭūṭa, Abū 'Abd Allāh b. Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Lawātī al-Tanḡī. *Tuḥfat al-nuẓẓār fī ḡarā'ib al-amṣār wa 'aḡā'ib al-asfār*. Ed. and trans. C. Defrémery and B.R. Sanguinetti. *Voyages d'Ibn Batoutah*. 4 vols. 1853-1858. Paris, 1879. (Publications of the Institute for the History of Arabic-Islamic Science. Ed. Fuat Sezgin, Islamic Geography. Vols. 175-178) Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994. [Ibn Baṭṭūṭa/DS]

The Travels of Ibn Baṭṭūṭa, A.D. 1325-1354. Trans. H.A.R. Gibb and C.F. Beckingham. 5 vols. London: Hakluyt Society, 1958-2000. [Ibn Baṭṭūṭa_trans/Gibb]

研 究

谷口淳一「中世南インドのムスリム知識人——ザイン・アッディーン・マアバリー著『ポルトガル人の諸情報におけるジハード戦士の贈り物』に関する覚え書き——」 森部豊・橋寺知子 編著『アジアにおける文化システムの展開と交流』 関西大学出版部、2012年：231-243頁. [谷口2012]

Agius, Dionisius A. *Classic ships of Islam: from Mesopotamia to the Indian*

- Ocean*. Leiden: Brill, 2008. [Agius 2008]
- Logan, William. *Malabar Manual*. 2 vols. Madras: The Government Press, 1887. New Delhi: Asian Educational Services, 2010. [Logan 1887]
- Mailaparambil, Binu John. *Lords of the Sea: the Ali Rajas of Cannanore and the Political Economy of Malabar (1663-1723)*. Leiden: Brill, 2012. [Mailaparambil 2012]
- Nainar, S. Muhammad Husayn. *Southern India as Known to Arab Geographers*. New Delhi: Cosmo, 2004. Rpt. of *Arab Geographers' Knowledge of Southern India*. 1942. [Nainar 1942]
- Narayana, M. T. "Kunjalis: The Muslim Admirals of Calicut." Ed. S. S. Shashi. *Encyclopaedia Indica: India, Pakistan, Bangladesh*. New Delhi: Anmol Publications, 1996-. Vol. 105: 1297-1307. [Narayana 2001]
- Tibbetts, Gerald Randall. *Arab Navigation in the Indian Ocean before the Coming of the Portuguese: Being a Translation of Kitāb al-Fawā'id fī uṣūl al-baḥr wa'l-qawā'id of Aḥmad b. Mājīd al-Najdī: together with an Introduction on the History of Arab Navigation, Notes on the Navigational Techniques and on the Topography of the Indian Ocean, and a Glossary of Navigational Terms*. 1971. London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, 1981. [Tibbetts 1971]